ESSAY

第66回ポーランド外科学会に参加して

白山通りクリニック 院長
東京女子医科大学 名誉教授
小川 健治

昨年 9 月 18 日から 21 日にわたり、第 66 回ポーランド外科学会がワルシャワで開催されました。会長は旧知の Krawczyk 教授（ワルシャワ医科大学 外科）（図 1 ）。「多くの日本人外科医に参加してほしい……」との依頼があり、総勢 17 名で、 2 つの“Japanese Symposium”を企画して参加しました。

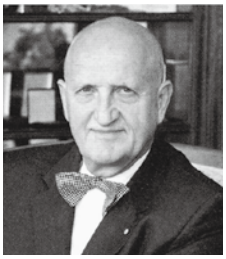

図 1　第66回ポーランド外科学会会長 Krawczyk 教授

私とポーランド

よく聞かれる私とポーランドとの関係は、私が西ドイツ（当時）のボン大学 移植外科に留学した 1988 年にさかのぼります（図 2 ）。ちょうど日本でも生体肝移植が始まったころで、もう 25 年になるでしょうか……。移植外科の主任は T.S Lie 教授で、ヨーロッパ大陸で初めて肝移植を成功させたご高名な方です。この研究室に、当時は共産国で出国もままならなかったはずのポーランドから、よく Olszewski 教授（ポーランド科学アカデミー 実験・移植外科）がみえていました。何の気まぐれか、Lie 教授が「ワルシャワにも行ってみたら……」と言われたので、Olszewski 教授に連れられてのこのことポーランド科学アカデミーを訪ね、彼の研究室で日本の胃癌について講演させていただきました（図 3 ）。

そこで「君の専門は胃癌か？ポーランドで胃癌なら Popiela 教授だ……」ということになり、急遽、クラコウのヤギェウォ大学も訪問しました（図 4 ）。クラコウはポーランドの古い首都（ワルシャワ遷都は 1596 年）、今は文化の街で、日本でいえば京都でしょう

図 2　1988年 ボン大学移植外科研究室、Lie 教授は後列右から 2 人目

図 3　1988年 ポーランド科学アカデミー、右端が Olszewski 教授

か。同大学は 1364 年設立、世界でもっとも古い大学の 1 つです。なお、Popiela 教授は 2009 年に第 8 回国際胃癌学会を主宰されました。これは記憶に新しいところです。

日本 - ポーランド外科学交流協会の設立

翌 1989 年、Popiela 教授がクラコウでポーランド外科学会 100 年記念大会を主宰され（図 5）、前年のご縁で、多くの日本人外科医を招待していただきました。会期中、私のドイツでの恩師 Lie 教授が「日本とポーランドの外科医が忌憚なく交流できるシステムを作ったらどうか……」と発言され、ポーランド側の代表に前述の Olszewski 教授を指名されました。そこで、日本側の代表は参加者の中から故 出月康夫教授（当時東京大学 第二外科）にお願いし、事務局を東京女子医大第二病院（現東医療センター）外科におき、実務は当時の梶原哲郎教授と私が担当することになり、日本 - ポーランド外科学交流協会（Japan-Poland Society for Exchange in Surgery）が設立されました。縁結びの神は Lie 教授、韓国のご出身ですがドイツ国籍を取得されており、日本語も堪能で、わが国の外科医とも広く交流されています（図 6）。

図4　1988年 ヤギェウォ大学、右が Popiela 教授、肖像画はポーランド外科学の父といわれる Rydygier 教授

図 5　1988年 ポーランド外科学会100年記念大会開会式、Jaruzekski大統領の挨拶、左端に会長の Popiela 教授

図 6　2008年 湯河原温泉、Lie教授ご夫妻

日本 - ポーランドシンポジウム

交流協会の活動の 1 つはシンポジウムの開催で、第 1 回は 1990 年にワルシャワで開かれました（図 7）。それ以降はポーランド外科学会に併せて、また日本では大きい学会の協力を得て、1992 年（2nd：東京）、1995 年（3rd：ワルシャワ）、1998 年（4th：東京）、2001 年（5th：横浜）、2003 年（6th：アウグストフ）、2004 年（7th：盛岡）、2005 年（8th：ワルシャワ）、2006 年（9th：広島）、2007 年（10th：ポズナン）、2009 年（11th：ワルシャワ、京都）、2011 年（12th：ウッチ）、昨年（13th：ワルシャワ）と開催してきました。

20 演題前後のシンポジウムですが、臨床で直面している症例、up-date な話題や手術手技などが報告され、さらに基礎的な研究データの発表もあります。いつも和気あいあいとした雰囲気のなか、討論や意見の交換が行われ、両国の外科学向上に有意義……と自賛しています。

人的交流も大切で、多くのポーランドの先生方に日本の学会に参加してもらっています。ちなみに、昨年会長の Krawczyk 教授は 2006 年の臨床外科学会で、そ

図 7　1990年 ワルシャワ、第 1 回日本 - ポーランド外科学交流協会シンポジウム集合写真、前列中央に出月教授、Olszewski 教授

の前の会長の Dziki 教授（ウッチ医科大学 一般・大腸・肛門外科）は 2010 年のやはり臨床外科学会で、特別講演を担当していただきました。また、本年 5 月の癌免疫外科研究会では、Olszewski 教授にシンポジストを依頼しています。若手外科医の交流は、これまで 7 名のポーランド外科医が 3 ～ 6 ヵ月の短期研修で東京女子医大、久留米大学、金沢大学などに滞在し、日本からは 1 名がウッチ医科大学を短期訪問するなど、交流を深めています。

図 8　2004年 大阪、Olszewski 教授日本外科学会名誉会員祝賀会、右列は草野教授、木村教授、梶原教授、左列は私と Olszewski 教授ご夫妻、水戸教授の撮影です

ポーランド外科学会

ポーランド外科学会は、1889 年に創設された歴史と伝統を誇る学会で、わが国では日本外科学会に相当します。学会は 2 年に 1 回の開催で“ポーランド外科医の祭典”ですが、この学会への参加も活動の 1 つです。前述のクラコウ以降、その都度多くの外科医をお誘いし、1993 年（56th：ルブリン）、1995 年（57th：シュチェチン）、1997 年（58th：カトヴィツェ）、1999 年（59th：ビィドゴシチ）、2003 年（61st：グダンスク）、2005 年（62nd：ビィヤウィストック）、2007 年（63rd：ポズナン）、2009 年（64th：ヴロツワフ）、2011 年（65th：ウッチ）、昨年（66th：ワルシャワ）と参加してきました。ほぼ皆勤賞ですね。

その間、1995 年には梶原教授と私がポーランド外科学会の名誉会員に推挙されるという光栄に与りました。また Olszewski 教授は、こうした一連の日本との交流活動が評価され、2004 年に日本外科学会のやはり名誉会員に叙されました（図 8）。彼の来日回数は数えきれません。かなりご高齢ですが元気、親日家であり知日家です。専門は実験外科、移植外科、リンパ管外科でしょうか。

第 66 回ポーランド外科学会

ようやく学会参加記ですが、本学会では「Ⅰ：Surgery for Hepato-Gastro- Intestinal Cancer in Japan」、「Ⅱ：Current Status of Liver Transplantation in Japan」という 2 つの Japanese Symposium を採択してもらいました。Ⅰは日本における食道癌、胃癌、大腸癌、肝臓癌の手術をビデオでポーランドの先生方に見ていただく、Ⅱは会長の Krawczyk 教授の専門が肝移植であることから、日本における肝移植の現況を紹介する……という企画です。

Ⅰでは、食道癌は虎ノ門病院 消化器外科の宇田川晴司部長（Video-assisted esophagectomy as a Japanese style radical surgery）、胃癌は山口大学 消化器・腫瘍外科の吉野茂文准教授（A hemi-double stapling method to create Billroth-I anastomosis following distal gastrectomy）、大腸癌は東京都立駒込病院の森 武生名誉院長（The standard curative resection of lower rectal cancer with lateral perlvic node resection and pelvic autonomic nerve preservation）、肝臓癌は日本大学板橋病院 消化器外科の高山忠利教授（Segment 1 resection of the liver）に各々担当していただきました。Ⅱは、死体肝移植を旭川医科大学 第二外科の古川博之教授（Current status of deceased liver transplantation in Japan）、生体肝移植を京都大学 肝胆膵・移植外科の海道利実准教授（Change

図9　シンポジウムⅠが終わり、ホッとして会場をバックに集合写真

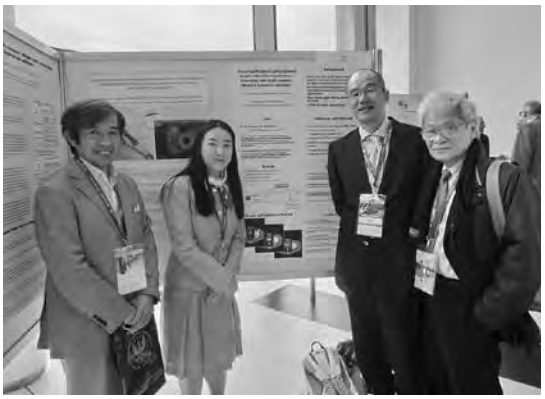

図10　ポスター会場での一コマ

and innovation in living donor liver transplantation in Kyoto University）にご担当いただきました。両シンポジウムとも学会初日の19日に開催、タイトルはカッコ内に示す通りで、時間は各30分です。聴衆がやや少なく、演者の先生方には申し訳なかったのですが、ともに素晴らしいシンポジウムになりました。一般演題は口演とポスターで、19日と20日に分かれ、京都大学 肝胆膵・移植外科の田中宏和先生、城原幹太先生、影山詔一先生、遠藤耕介先生、日本大学 消化器外科の大久保貴生先生、黒川友晴先生、森先生グループの松田病院（浜松）外科の田中荘一先生、西日本病院（熊本）外科の本田志延先生らが発表されました。ポーランドの先生方に混じっての発表で大変でしたが、活気あふれる討論が交わされました（図9, 10）。

前述の日本 - ポーランドシンポジウムは、付置シンポジウムの扱いです。“Conquering Cancer–No Borders for Research”をテーマに20日に開かれ、両田中先生、大久保先生、遠藤先生、城原先生、影山先生らが口演発表されました。ポーランドからは9題で計15題、2時間のシンポジウムで、これも盛会裡に終えることができました。

今回は、演者の14名に加え、もっぱら司会役の私と、私の娘の小川雅子（青梅市立総合病院 外科）、高山先生令夫人の計17名での参加でした。演者の先生方、本当に有り難うございました。本誌面を借りまして、厚くお礼申し上げます。

国際学会の楽しみ

国際学会では観光も楽しみです。学会スケジュールはこのようにタイトでしたが、ほとんどの方がポーランドは初めてということ

図11　旧市街の一角、ワルシャワに遷都したZygmunt 3世の王宮

図12　ワジェンキ公園、ショパン像をバックに集合写真

図13　“Surgeon's Picnic”、会長の Krawczyk 教授を囲んで

図14　Olszewski 教授主催の歓迎レセプション、皆さん笑顔ですね

で、観光にもなるべく時間を割きました。学会前日の 18 日には、宇田川先生、古川先生、吉野先生、高山先生の日大グループと一緒に、少しワルシャワを観光しました。旧市街を散策し、やや郊外のワジェンキ公園まで足を延ばしました（図 11, 12）。夜は、由緒ある国立オペラ劇場での開会式に参加しましたが、長いポーランド語の挨拶に一同退屈しました。

ワルシャワの街は、先の戦争でナチス・ドイツの攻撃を受け灰燼に帰しました。しかしこの旧市街は、市民が瓦礫を整理し、煉瓦を一つひとつ集め、できる限り元通りに復元したと聞いています。ポーランドの国民性は不屈、歴史と伝統を大切に……といわれますが、それを感じるエピソードですね。また、公園も多くあり、中でもワジェンキ公園はヨーロッパでもっとも美しい公園の 1 つに数えられます。ポーランドの木は柳ですが、その根元にすわるショパン像も有名で、私のお勧め観光スポットです。

あとは食事でしょうか、学会初日は、会長主催の全員懇親会がありました。会場の庭に大きなテントが張られ、若手から大御所まで、多くの方が参加していました（図13）。“Surgeon's Picnic”、アウトドアが好きなポーランド人ならではのネーミングですが、テントは少し寒かったですね。

2 日目は、市内のレストランで Olszewski 教授主催の歓迎レセプションがあり、ここでも懇親を深めました（図 14）。食事のメニューは、やはり肉とポテト、それにスープ類が中心です。お肉は少し重たい、スープは茸のポタージュが美味でした。それ以外に、今回は郷土料理のピエロギを皆でよく食べました。中国の餃子がロシア経由で伝わり、アレンジされたものらしいのですが、私たちの口にもよく合いました。

21 日朝に解散、京大グループの若手 4 名はレンタカーでドイツを廻って帰るとのことで、ほかは予定通りの飛行機で帰国の途につきました。今回、森先生グループは学会前にレンタカーでクラコウを訪問され、ポーランドの自然も堪能されたと聞きました。吉野先生も、日帰りでクラコウとアウシュビッツを訪問されました。学会は本当にタイトでしたが、参加された先生方には、学会はもちろん、それ以外にもいろいろな面で楽しんでいただくことができました。参加を呼びかけた私としましても、大変嬉しく思っています。また、ポーランドの道路事情はほかの EU 諸国に比べれば悪く、運転も乱暴です。私自身はポーランドで運転したことはありません。レンタカーに事故がなくて本当によかった……正直なところです。

ポーランドの魅力は、人間性の良さと自然の美しさにあります。しかも親日的です。今後ともポーランドの先生方と交流し、多くの日本の先生方にも、そうした魅力に触れてもらいたいと考えています。本稿を読んでいただき、ポーランドに興味をもたれた方、ぜひ外科学会やシンポジウムに参加してみたいと思われた方、大歓迎です。私までご連絡ください。

ESSAY